

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

追想・榎原好忠先生：個人的な、余りに個人的な

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 1977-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 慎吾, Kawai, S. メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2213">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2213</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 追 想・檜原好忠先生

——個人的な、余りに個人的な——

河 合 慎 吾

それは、1976年5月23日、午後2時すぎのことであった。

研究所長の川崎武夫先生から、お電話だと家人がいう。何事ならんと、受話器をとると、「トルコ方面を研究旅行中の檜原先生が、イスタンブールで、急死されたという通知が、今、入った。日曜日ではあり、大使館その他の関係方面の連絡もとりにくく、詳細は不明であるが、とりあえず、古い友人のようであるから、あなたにもお知らせする」ということであった。一瞬、同君との、かれこれ40年近くにもなる“つきあい”のさまざまな情景が、走馬灯のように（この陳腐な比喩が、全くピッタリという実感であった）胸中を往き来し、暫く受話器を握ったまま、立ちつくしたことであった。

早速、香華を整えて、平野のお宅を叩門することとした。久しぶりに会う富世夫人は、「あまり突然のことで、ただ、呆然とするのみ。実感がないので祭壇を作る気もしない」といわれる。まさに、そのとおりであろう。2人で、ぼつりぼつり、回想談をしている間に、またしても、この40年近くの歳月の思い出が、それからそれへと続き、時間のたつのも、忘れるおもいであった。

外大論叢編集委員会から、檜原先生の記念号を出すから、何か追悼の文章を書けというご依頼である。しかし、専門も違だし、同君の学術的な業績を紹介したりする能力も資格もないので、極力固辞したが、許していただけない。やむなく、個人的な、余りにも個人的な思い出の2、3を綴って、その

責を果すこととする。このことを、予め断っておきたい。

榎原君（“先生”ではどうも感じがでなくて、書きにくいので、以下こう呼ばせていただく）と、はじめて会ったのは、1939年4月1日、財団法人東亜研究所の新卒所員の入所式の会場であった。東亜研究所とは、その前年秋、「“東亜新秩序”（ああ、この懐しい言葉よ！）の確立のための基礎理論の研究と構築」をうたい文句に、時の首相近衛文磨を総裁にかついで、企画院の肝入りで、東京お茶の水に、創立された所員150名余りの研究機関である。所員のなかには、見るからに大陸浪人的な風格の人がいるかと思えば、「日本資本主義発達史講座」の平野義太郎や山田盛太郎の名も見え、まことに得体の知れない、それだけに比較的自由的な空気をもった集団であった。

2年前に始まった日中戦争は、既に泥沼の様相を呈し、その後のこの国の運命を暗示していたが、なお、生活物資も思想言論の自由も、まだまだ豊かであり、同時入所の新卒の所員10数名は、1部から5部まで、配属の部は異なったが、“東研新人会”なるものを組織し、月1回の研究会と称する例会をもって、飲んだり、食ったり、話したり……。たとえ、いびつなものであったにせよ、国の青春と個人の青春が、結びつくことのできた幸福な時代であったのかも知れない、と今にして思う。

その後4年余りして、榎原君の姿が研究所から見えなくなった。仄聞するところによれば、何でも、夫人の実家のある神戸に帰って、京都大学の大学院で、地政学の小牧実乗教授について、新しく研究生活に入っているというのであった。同じ研究所にしながら“仄聞する”もおかしいが、当時、戦局は日々緊張の度を加え、榎原君は水道橋の分室勤務となり、仕事は忙しくなるし、東研新人会の例会どころではない状況であったのである。まさに、召集令状と空襲におびえながら、その日その日の生存を、確め合うような日々の連続であった。

そうして、3年余のブランクの後に、同君と再会したのは1946年の晩秋、焼け残った神戸三越の近くの、まだ瓦礫の原という感じの残った街頭であっ

た。「おう、元気だったのか。お互いに、よく生きていたなあ」というような挨拶のあとで、同君は、現在も、京都大学大学院に席をおきながら、週に1度ある専門学校に非常勤講師として人文地理の講義に通っていると語った。わたしも、東亜研究所の解散とともに、神戸に移住し、おりから創立された神戸市立外事専門学校に勤めていたので、「また、同業になったか」などと語り合ったことであった。まさに30年前のことである。それが、この度の同君の不慮の死をきくにつけても、昨日のここのように思い出されてならない。

1950年4月、同君が神戸外大に赴任され、再び職場をともにするようになったのは、まことに奇しき縁縁といわざるを得ないが、その後のことについては、紙数の関係もあり省略する。外大在職中の同君が授業・研究以外にも、たとえば水泳部の顧問として、公式プールの建設に努力されたことなど、今なお関係者の記憶に新しいところであろう。

この度、壮大な研究計画のもとに、多年の念願であった海外研究旅行に出発され、多くの成果が期待されていたのに、不幸にして志の半ばにして倒れられたことは、まことに痛恨の極みである。イスタンブールの宿の1室で、最期に、同君の胸中に去来したものは、果して何であったろうか。思うて、ここに到れば、まさに哀悼の涙なきを得ないのである。しかし、ひるがえって考えれば、年若くしてトルコ研究に志されてより、40年近く（同君は、国学院大学在学当時から内藤智秀先生の指導をうけ、トルコ語のレッスンに通っておられたようであった）、そのトルコの古都で、研究旅行中に客死されたということは、研究者としての本懐といえるのかも知れない。“以って瞑すべし”というべきであろうか。

それにしても、訃報しきりと到る昨今である。数えてみると、東研新人会の半数近くが、既に鬼籍に入っているようである。この5月にも、東研新人会でも、最も健康を誇っていた共通の親しい友人前田隆良君が、テレビ和歌山専務の現職のまま、不帰の客となった。このことについて、榎原富世夫人と電話で話したとき、夫人はいわれた。「ちょうど、うちの主人がなくなっ

てから1年目。きっと今頃は天国で、先輩顔して前田さんを案内してまわっていることでしょう」と。

これを聞いて思わずハッとした。「子を知るもの親にしかず」とかいうが、「最もよく夫を知るもの妻にしかず」かも知れない。ことに、榎原君の場合は、実子に恵まれなかっただけに、夫婦間の相互理解には、ひとしお深いものがあつたのではないか。富世夫人への哀悼の念、さらに厚いものをおぼえる所以である。

紙数もつきたようである。最後に1言。

榎原好忠君の霊に申しあげる。安らかに眠りたまえ。君が最も心を残したであろう富世夫人はご健在であり、養女京子さんもまた、高校生ながら母君を助けて遺憾なき様子。ときには、母子あいたずさえて、君の終焉の地イスタンブールを、訪う計画も練っておられるとかと聞く。どうか、安らかにお眠りにくださらんことを——。それにしても、富世夫人のいわれるように、君は前田君と天国で再会、置酒会談の機会を得られたであろうか……。30数年前、3人でよく歩いたお茶の水界限の風景を偲びながら、重ねて、ご冥福を祈って筆をおく。合掌。(1977, 10, 25)